

湯浅党城館跡

国史跡指定記念シンポジウム

第2回
シンポジウム

「湯浅党城館跡の保存と活用」



発表資料集

令和3年3月20日(土)

有田川町教育委員会・湯浅町教育委員会

開催にあたって

温暖で蜜柑栽培に適した自然豊かな地域である有田地方には、平安時代末期から南北朝時代にかけて、紀伊国で強大な勢力を振るった武士団である「湯浅党」が本拠を構えたことにより、明恵上人紀州八所遺跡をはじめとした、湯浅党に関連する遺跡や古文書といった数多くの文化財が残されています。

そこで、平成28年度より、有田市・湯浅町・有田川町は「有田郡市中世城郭保存活用のための連携・協力に関する協定書」を締結し、共に湯浅党関連城館遺跡の調査を進めてまいりました。そして、令和2年11月20日、湯浅城跡及び藤並館跡が「湯浅党城館跡」として文化審議会より国史跡として指定するよう答申され、これまでの調査が実を結んだところであります。

本シンポジウムは、これまでの調査成果を報告し、湯浅党城館跡について広く知っていただくことを目的としております。また、城館遺跡の保存整備の事例に学び、湯浅党城館跡の今後の保存や活用について皆様と考えるきっかけとなりましたら幸いです。

最後になりましたが、本シンポジウムを開催するにあたりまして、ご協力いただきました多くの機関、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

令和3年3月20日

湯浅町教育委員会

教育長 垣内 淳

湯浅党城館跡国史跡指定記念第2回シンポジウム

「湯浅党城館跡の保存と活用」開催日程

13:00～13:05 開会挨拶 湯浅町長 上山章善

13:05～13:20 「湯浅党城館跡の概要」 中原七菜子（湯浅町教育委員会）

記念講演

13:20～14:30 「国史跡湯浅党城館跡の特徴と魅力－今後の保存活用に向けて－」

中井 均氏（滋賀県立大学人間文化学部）

14:30～14:40 休憩

事例報告

14:40～15:10 報告1 「越後国奥山荘城館遺跡の整備と活用」

水澤幸一氏（新潟県胎内市役所）

15:10～15:40 報告2 「予土国境最前線の中世山城 河後森城跡の整備と活用」

亀澤一平氏（愛媛県松野町教育委員会）

15:40～15:50 休憩

シンポジウム

15:50～16:55 「湯浅党城館跡の保存と活用」

コーディネーター：佐藤亜聖氏（公益財団法人元興寺文化財研究所）

パネリスト：水澤幸一氏、亀澤一平氏、湯浅町・有田川町文化財担当職員

16:55～17:00 閉会挨拶 湯浅町教育長 垣内 淳

開催日時 令和3年3月20日（土） 13:00～17:00

会場 湯浅えき蔵3階 地域交流センター（和歌山県有田郡湯浅町1075-9）

主催 有田川町教育委員会・湯浅町教育委員会

後援 和歌山県教育委員会・有田地方文化財研究会・和歌山地方史研究会・和歌山城郭調査研究会

目 次

開催にあたって

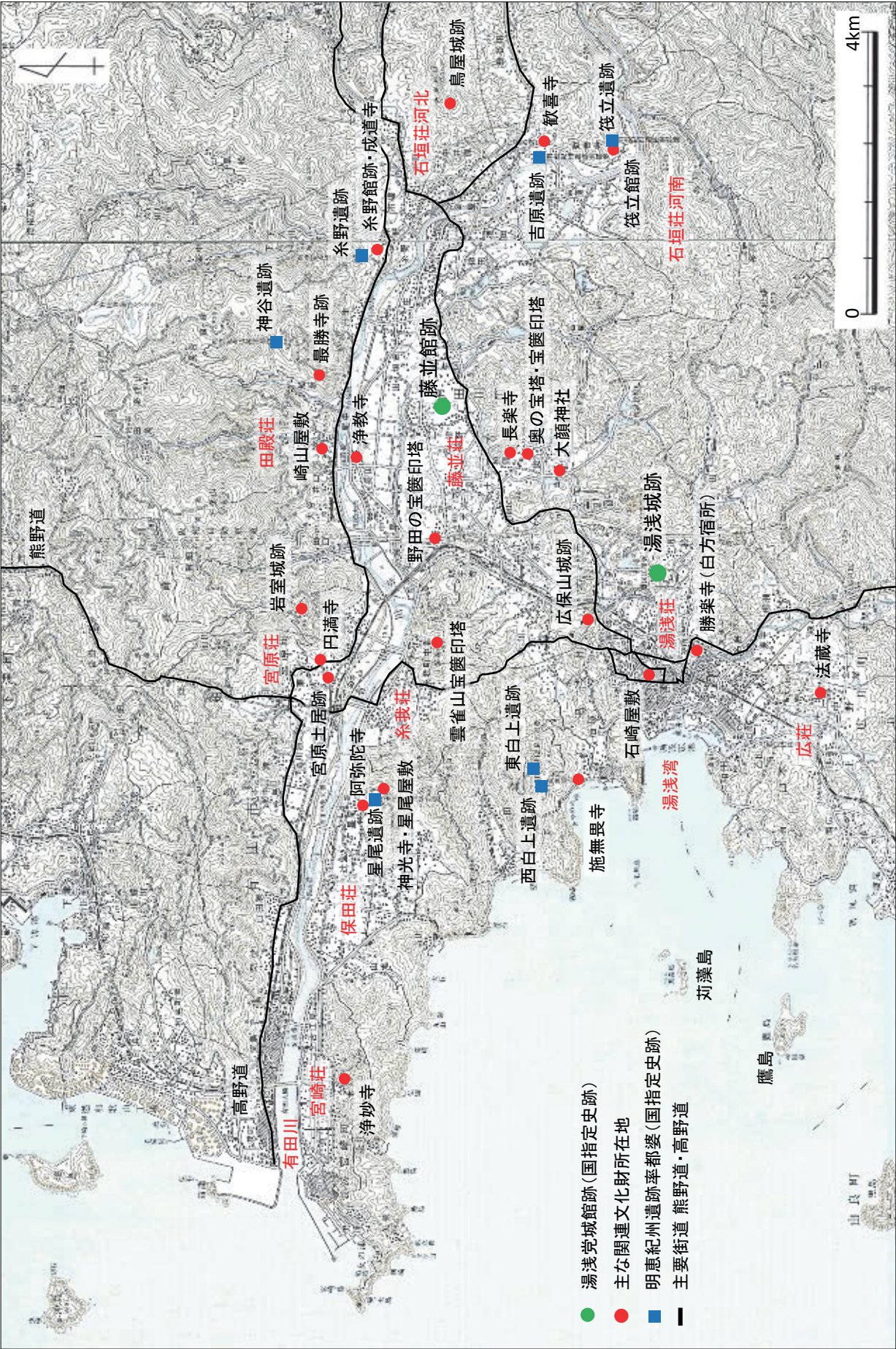
開催日程

目次

有田川下流域における湯浅党関連の主要文化財所在地図

記 念 講 演	「国史跡湯浅党城館跡の特徴と魅力－今後の保存活用に向けて－」	1
	中井 均氏（滋賀県立大学人間文化学部）	
資 料	「湯浅党城館跡の概要」	5
事例報告 1	「越後国奥山荘城館遺跡の整備と活用」	25
	水澤幸一氏（新潟県胎内市役所）	
事例報告 2	「予土国境最前線の中世山城 河後森城跡の整備と活用」	37
	亀澤一平氏（愛媛県松野町教育委員会）	

1. 本書は、「湯浅党城館跡国史跡指定記念第2回シンポジウム」の発表資料集である。
2. 本シンポジウムの開催にあたり、ご協力いただきました多くの関係機関、関係者の皆様に深く感謝の意を表します。
3. このシンポジウムは、令和2年度国宝・重要文化財等保存・活用事業費（地域の特色ある埋蔵文化財活用事業費）補助金を受けて実施した。
4. 本書の編集は、川口修実（有田川町教育委員会）が担当した。



有田川下流域における湯浅党関連の主要文化財所在地図

国史跡湯浅党城館跡の特徴と魅力

—今後の保存活用に向けて—

中井 均（滋賀県立大学人間文化学部）

はじめに

湯浅党城館跡が国史跡に指定された（答申）。平成28年度から令和元年度にかけて実施された湯浅党関連の遺跡及び文化財の総合調査による成果が評価されたものである。調査は遺跡、城館、史料、石造物、宗教美術と多岐にわたっている。そうしたなかから今回は藤並館跡と湯浅城跡が湯浅党城館跡として史跡指定に答申されたのである。

和歌山県下には中・近世の城館跡で国史跡に指定されているのが、和歌山城（1991. 3. 30指定）、新宮城跡附水野家墓所（2003. 8. 27指定）、安宅氏城館跡（安宅氏居館跡、八幡山城跡、中山城跡、土井城跡、要害山城跡：2020. 3. 10指定）に次いで4番目となる。件数で言えば滋賀県では近世城郭が2件（安土城、彦根城でいずれも特別史跡）、中世城館が9件、計11件が指定されており、指定件数としてはそう多いほうではないが戦国期2件、近世城郭2件といずれもの事例があり、県内の中近世城館を概観することができる。近年の指定がいずれも中世の城館跡であることは県内での関心の高さを示しているものとして注目してよいだろう。

今後は指定した城館跡をどう整備し、どう活用していくのかが大きな課題となるが、そうした課題を解決するために、まず湯浅党城館跡の特徴と魅力についてまとめておきたい。

1. 藤並館跡の調査成果

藤並館跡の発掘調査中に連絡をいただき、現地へ見学に寄せていただいたのが2017年9月12日であった。当初は戦国期の方形館と思っていたのであるが、調査によって瓦が出土していることを知り、極めて重要な遺跡であることを思い知らされた。

館跡は有田川を望む河岸段丘の先端に選地し、堀幅を含めると南北約87m、東西約75mを測る規模の方形館構造である。館の四周には土塁が巡らされており、そうした堀や土塁を除く館内部は一辺がほぼ50m、つまり半町四方の規模となる。

発掘調査による最大の成果は年代を絞り込むことの出来る遺物が出土することである。実は方形館は13世紀頃の成立期より16世紀後半に至るまでその構造に変化がほとんど認められない。そのため実際に館が機能していた年代や廃絶した年代を残存する遺構から判断することが出来ない。藤並館跡では発掘調査によって土塁が少なくとも3期にわたって増築されていることが明らかとなった稀有な事例である。その第1期土塁で出土した瓦器などから13世紀後葉頃に構築されたものと考えられている。

武士の居館としての方形館の登場は関東では14世紀以降と考えられており、西国では12世紀頃と考えられている。藤並館の構築も西国の居館と同じ動きのなかで構築されたことが明らかとなったのである。面白いのは土塁の存在である。西国での12世紀の居館として押さえることのできる長原遺跡では館の周囲に遺構のない空間が存在し、土塁が掘削されたものと考えられてはいたが、実際に13世紀以前の土塁が残されている館跡はまずない。藤並館跡の土塁は鎌倉時代の武士の居館には土塁が巡らされていた大きな証拠となるのである。

実は『法然上人絵伝』や『一遍上人絵伝』などに描かれている地方の武士の館には堀や土塁が描かれていない。こうした絵画資料から鎌倉武士の居館には堀や土塁は存在せず、方形館に堀や土塁が出現するのは14世紀以降であると考えられていたのであるが、藤並館跡の調査からは鎌倉時代の地方の武士の館に堀と土塁の存在していたことが明らかになったのである。

今一つ注目できるのはこうした13世紀の館が廃絶せずに14世紀以降も同じ場所で16世紀まで存在したことである。14世紀以前に成立する居館の大半は南北朝時代に廃絶する。地方の武士が動乱期を乗り切ることができなかったのだろう。例えば河内の日置荘遺跡の居館も13世紀初めに築かれた半町四方規模の方形館であったが、14世紀末に廃絶している。一方で16世紀後半の居館はその出現が南北朝の動乱期の後となる事例が多い。そうしたなかで藤並館は鎌倉時代に築かれ、16世紀後半まで場所も移動せず居館として機能し続けたことは大きな特徴である。

土塁は15世紀に増築され（第2期土塁）、さらに16世紀中頃から後半に土塁幅を拡張する増築のおこなわれていることも明らかとなっている（第3期土塁）。方形館を平城として防御を強固なものとする増改築であったと見られる。それは応仁文明の乱（15世紀中頃）と、戦国時代（16世紀中頃）という軍事的緊張段階と見事に重複している。

また、第3期土塁内からの瓦の出土もこの館にとって大きな特徴と言えよう。普遍的に城館に瓦が用いられるのは天正4年（1576）の織田信長による安土築城以後のことである。ただ、例外的に近畿地方や北部九州などではそれ以前に瓦の葺かれる城館が存在する。近畿では河内、大和、摂津、播磨などで近江や紀伊ではこれまで知られていない。それが藤並館では用いられていたことが今回明らかとなったのである。これは館内の建物に用いられたものか、それとも館内に営まれた仏堂などの宗教施設に用いられたものなのかを分析することが課題となろう。

そしてこの館が単に藤並氏の居館として防御を強固にするために水堀が掘られたものでないことが、堀底の堰状遺構の検出でうかがうことができる。居館の堀というとすぐに防御施設とイメージされがちであるが、実は周囲の水田への水源としての機能も有していたものと考えられるのである。それは多くの居館の発掘調査で堀から外側に伸びる水路が検出されていることから、外部との関わりの存在したことが指摘できよう。水田への水の供給は川などからの冷水では稲の発育を遅らせてしまう。そこで領主の居館の堀で滞水させることにより水温を上げてから水田に供給したのである。長原遺跡や上久世城ノ内遺跡でも堰状遺構が堀内から検出されており、やはり灌漑用水の機能を果たしていたものと見られる。藤並氏が在地領主として河岸段丘上より水を供給していたのであろう。

このように藤並館跡の調査成果は西国の居館のあり方を知るうえで実に多くの情報を提供してくれたのである。

2. 湯浅城跡の調査成果

湯浅城跡は湯浅の町の東に位置する山塊の突端を利用して築かれた山城である。ここからは湯浅の町並みや湯浅湾、熊野街道などが一望できる。湯浅氏の居館と見られる宝林寺（湯浅屋敷）や石崎屋敷（岩崎館）の東方約1.5kmに位置している。こうした選地からもこの山城が湯浅を押さえる目的で築かれたことがわかる。

その構造は山頂部に主郭Ⅰ、副郭Ⅱを配置し、Ⅰ郭の西に伸びる尾根筋上に櫓台Ⅲと腰曲輪を階段状に配置する。Ⅰ郭の南にも階段状に曲輪を配し、Ⅱ郭の南にも曲輪を設け、その間の谷筋部にⅣ郭が配置される。Ⅳ郭の中央部は円形に窪み、その開口部を閉鎖するように土塁が両側より伸びる。Ⅰ郭より

南西に伸びる尾根筋にも階段状に腰曲輪が配され、その先端には物見としてのV郭が配されている。

I、II、III郭間とII郭の南側の曲輪東面には土塁が構えられ、北、東二面に対しての防御意識の強い城であることがわかる。

発掘調査の結果、谷筋に構えられたIV区は自然地形を整地して平坦面を造成したことが明らかにされたのであるが、その整地は出土した遺物より13世紀にさかのぼることが明らかとなっている。さらに検出された遺構は礎石建物であった。このように湯浅城は鎌倉時代には城として機能していたことが判明している。

日本における山城の成立は14世紀の南北朝時代だと考えられている。それは鎌倉幕府の正規軍としての騎兵に対処するためであった。倒幕軍としての後醍醐天皇方は正規軍を持たない。そのため幕府正規軍の騎兵と戦うことができない。そのために馬の登れない山城を構えたのである。この南北朝時代の山城は人工的な防御施設をほとんど持たず、高い山に閉籠することこそが山城であった。

こうした南北朝の山城に先行する山城の存在をどう評価すればよいのであろうか。遠江の横地城では山麓の谷筋に鎌倉時代の居館が確認されている。湯浅城の場合もIV郭で鎌倉時代の遺構が検出されたことは、IV郭が谷筋の最奥部に構えられた居館であったと考えられよう。背面の曲輪群はその後の戦国時代に削平されたもので、IV郭に居館が構えられた段階では館背面の山そのものだったのではないだろうか。

一方、『平家物語』に湯浅宗重が平忠房を擁して湯浅城に立て籠ったことが記されており、実際に治承・寿永の内乱で閉籠する城郭の存在が知られる稀有の事例でもある。

なお、遺物には茶道具としての瓦質土器の風炉をはじめ、古瀬戸折縁皿、中国製青磁などが出土しており、単なる防御施設の山城ではなく、こうした遺物からも居館として機能していたことを示している。

このように湯浅城跡は我が国の山城成立過程を考えるうえで非常に重要な意味を持つ。

3. 湯浅党城館跡の保存と活用

有田川下流域を中心として平安時代末期から南北朝期に勢力を有していた武士団「湯浅党」の具体的な活動を物語る遺跡としての藤並館跡、湯浅城跡の特徴を押さえることができた。中世前期の武士団の姿を具体的に物語る遺跡はそう多くはない。それは戦国時代に大きく改修されるなどして中世前期の姿を伝えていないわけである。そうしたなかにあって藤並館跡と湯浅城跡は13世紀からの遺構や遺物を伝えるという極めて貴重な城館跡であることが判明したのである。まずはそうした特徴を伝えることが重要である。

ここ数年来のお城ブームによって多くの国民が中世の城と近世の城の違いを知ることとなった。しかし、それはまだ少数でしかない。そこで具体的な姿のわかるCGなどの作成は必要である。私はアナログではあるが模型がもっとも有効であると考えている。発掘が進むと模型ではいくらでも手直しが効く。さらには老若男女、誰にでも簡単に見てもらえることができる。できれば現況の地形模型と、復元模型を並べて見てもらえるとより理解を深めてもらえることも出来るだろう。

もちろん現地でも館内敷地全域での発掘調査を実施することは必須である。館内での建物配置や庭園の有無などを明らかにしなければならない。そして堀や建物跡の露天展示により本物の館跡に触れてほしい。中世前期の居館や山城を学ぶ野外博物館としての整備が重要となるだろう。

活用についてはまずは地域の誇りとしてほしい。郷土愛の醸造につながる活用が大事になるだろう。そのため地域に保存会を立ち上げ、地域住民による保存や活用を進める団体の育成が重要となるだろう。

外からの見学者にとっては見学ルートを設定し、両方の城館を巡れるようにしたい。さらには総合調査によって明らかにされた寺院跡、遺跡、城館跡、石造物、仏像など湯浅氏に関わる史跡にも立ち寄れるコース設定が必要である。保存会でボランティアガイドの養成も必要となってくるだろう。

おわりに

このように湯浅党城館跡は全国的に他に例を見ることの出来ない特徴を有していることが明らかとなった。さらにこの地域の中世はそこで終わるのではない。その後の歴史も地域に残された城跡などからうかがい知ることができる。将来的にはそうした山城も含めてさらに広域的な歴史資産の活用に期待される場所である。

また、2020年に国史跡に指定された安宅氏城館跡との連携なども必要となるだろう。戦国時代後半の発達した縄張りを有する山城が指定された安宅氏城館跡との比較によって中世前期、後期の城館のあり方がさらに深く学ぶことが出来るだろう。

湯浅党城館跡の国史跡指定が、有田川流域の豊富な歴史資産を地域の誇りとなることに大いに期待したい。

湯浅党城館跡 湯浅城跡 藤並館跡の概要

【史跡の価値】

湯浅党城館跡は、平安時代末期から南北朝期の紀伊国において大きな勢威を振るった湯浅一族を中核とする武士団「湯浅党」の城館跡である。湯浅党の研究史は古く、既に戦前から中世武士団の典型事例として取り上げられ、今日まで多くの研究成果が蓄積されてきた。これは全国的にも豊富で多様な関連史料が伝来するためであり、様々な視点から武士団の動向を観察することができる。湯浅党の本拠である有田地方は、文献史料以外にも湯浅党を物語る遺跡や寺社、美術工芸品、石造物といった多様な文化遺産が数多く残されており、これら湯浅党関連の文化遺産を総合的に検討することによって、中世武士団の具体的なあり方を知ることができる全国的にも数少ない地域の一つとして、日本中世史の中でも重要な位置を占めている。

湯浅党城館跡は、日本の中世前期の武士団の典型として重要な湯浅党を象徴する遺跡である。湯浅城跡は、湯浅本宗家が本拠とする湯浅荘にあり、交通の要衝を掌握するための町場に形成された拠点群とともに、丘陵に形成された軍事的な拠点として本拠を構成する重要な要素である。発掘調査の成果から、城内最大の平坦面が遅くとも13世紀には谷状の自然地形を埋め立てて構築していることが判明するなど、その縄張りの基礎が湯浅氏によって形作られた可能性が高まった。藤並館跡については、現存する土塁の下層において全国的にも検出例が少ない鎌倉時代に遡る土塁が確認され、さらに土塁のみならず下層遺構の存在からも館内部に中世前期の遺構が保存されている可能性が高まった。このことから、館の基本構造は藤並氏によって形成され、戦国時代にかけて改変が繰り返されていたことが明らかとなった。

湯浅城跡は湯浅氏「一門」の本拠を構成する重要遺跡で、儀礼の場であるとともに要害としての性格を有し、一方、藤並館跡は平地に形成された支配拠点として「他門」の代表的な存在である藤並氏に関わる遺跡であり、それぞれ湯浅党の「一門」と「他門」を象徴する城館として位置づけられる。湯浅党の本拠地に形成されたこれらの城館跡は、豊富に残る文献史料と有田川流域に残る湯浅党関連の寺院や石造物などとともに、中世前期の社会状況を示しており、我が国の中世前期の武士団のあり方を知る上で重要である。



写真1 湯浅党の本拠（南西から）

湯浅城跡

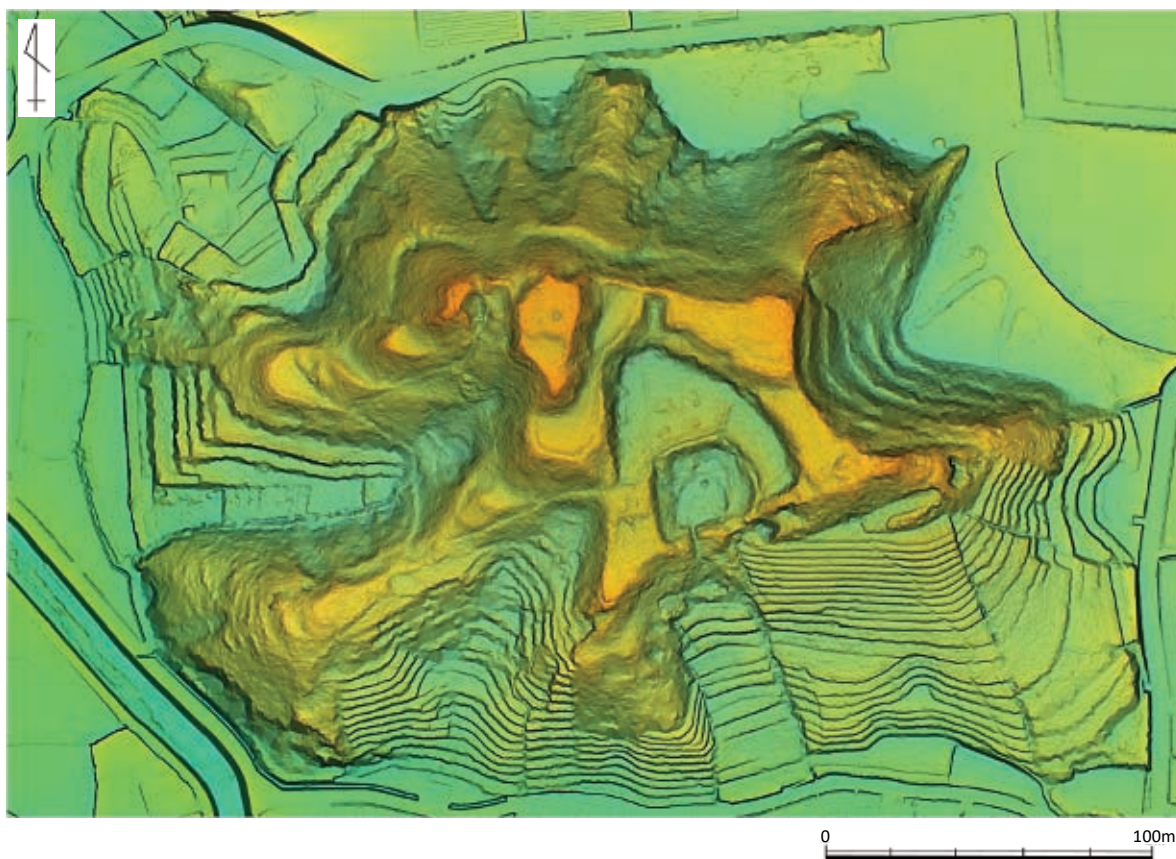


図1 湯浅城跡地形起伏図



図2 湯浅城跡縄張り図



写真2 湯浅城跡上空から湯浅市街地を望む（東から）



写真3 湯浅城跡近景（南から）



写真4 湯浅城跡から湯浅の町場を望む（東から）



写真5 曲輪Ⅰ（南から）



写真6 曲輪Ⅰ南側の曲輪（南から）



写真7 土塁（曲輪ⅠとⅡの間）（東から）



写真8 曲輪Ⅱ（西から）



写真9 曲輪Ⅲと土塁（東から）



写真10 曲輪Ⅴ（北東から）



写真11 曲輪Ⅳ（北西から）



写真12 曲輪Ⅳ発掘調査前の状況（西から）



写真13 曲輪Ⅳ発掘調査状況（西から）



写真14 焼土層（北東から）



写真15 礎石と土師器（西から）



写真16 焼土層の遺物出土状況（南から）



写真17 礎石と整地土



写真18 室町時代の鍛冶炉（北から）



写真19 堆積状況（南から）



写真20 曲輪Ⅳ出土遺物



写真21 堀切の発掘調査状況（南東から）



写真22 堀切の発掘調査状況（北から）



写真23 堀切土層堆積状況（南から）



写真24 曲輪Ⅱの発掘調査状況（北西から）

藤並館跡



写真25 藤並館跡航空写真

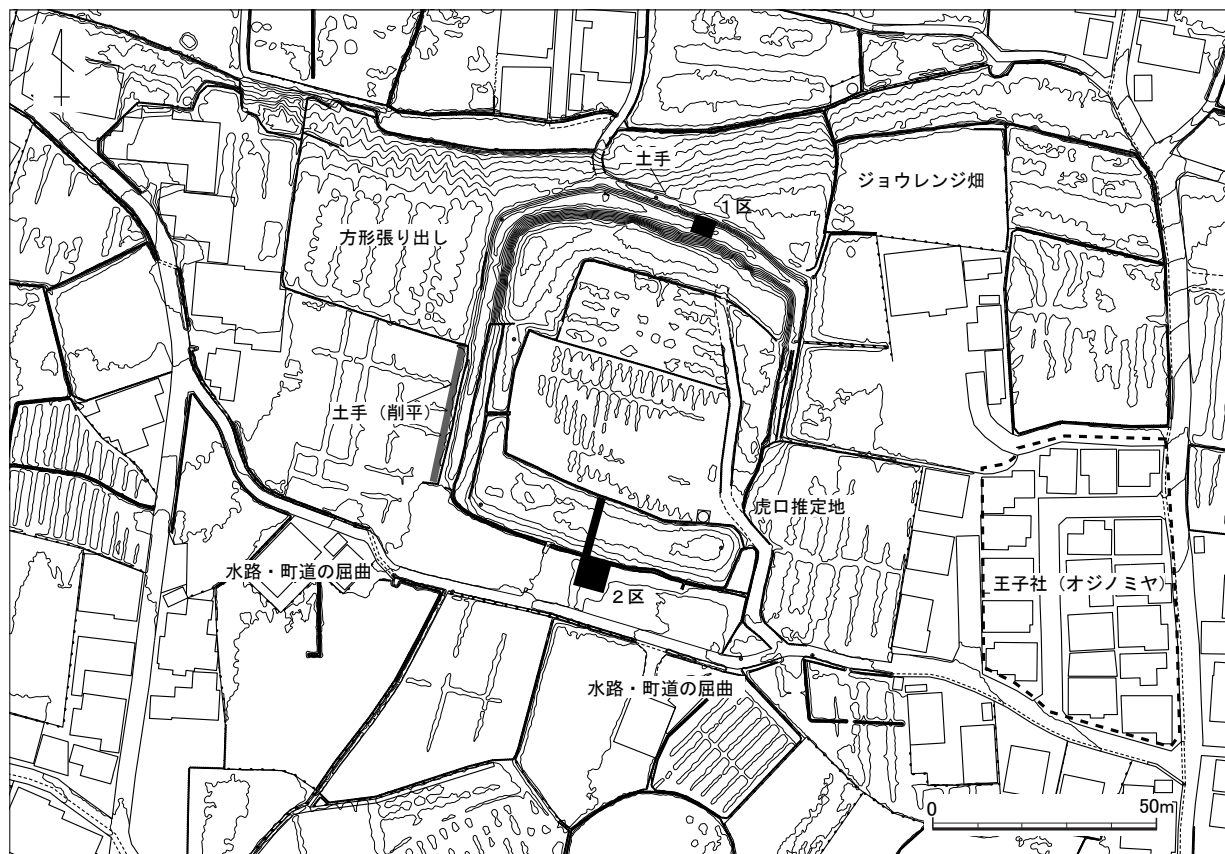


図3 藤並館跡測量図・調査区配置図



写真26 北堀・土塁（東から）



写真27 北堀・土塁（西から）



写真28 東堀・土塁（北から）



写真29 南堀跡・土塁（南東から）



写真30 小口推定地（南から）



写真31 方形張り出し（南東から）



写真32 藤並館跡（南東から）



写真33 藤並館跡（南西から）



写真34 北堀の発掘調査状況（東から）



写真35 北堀と北側土塁（北から）



写真36 南堀と南側土塁の発掘調査状況（南から）

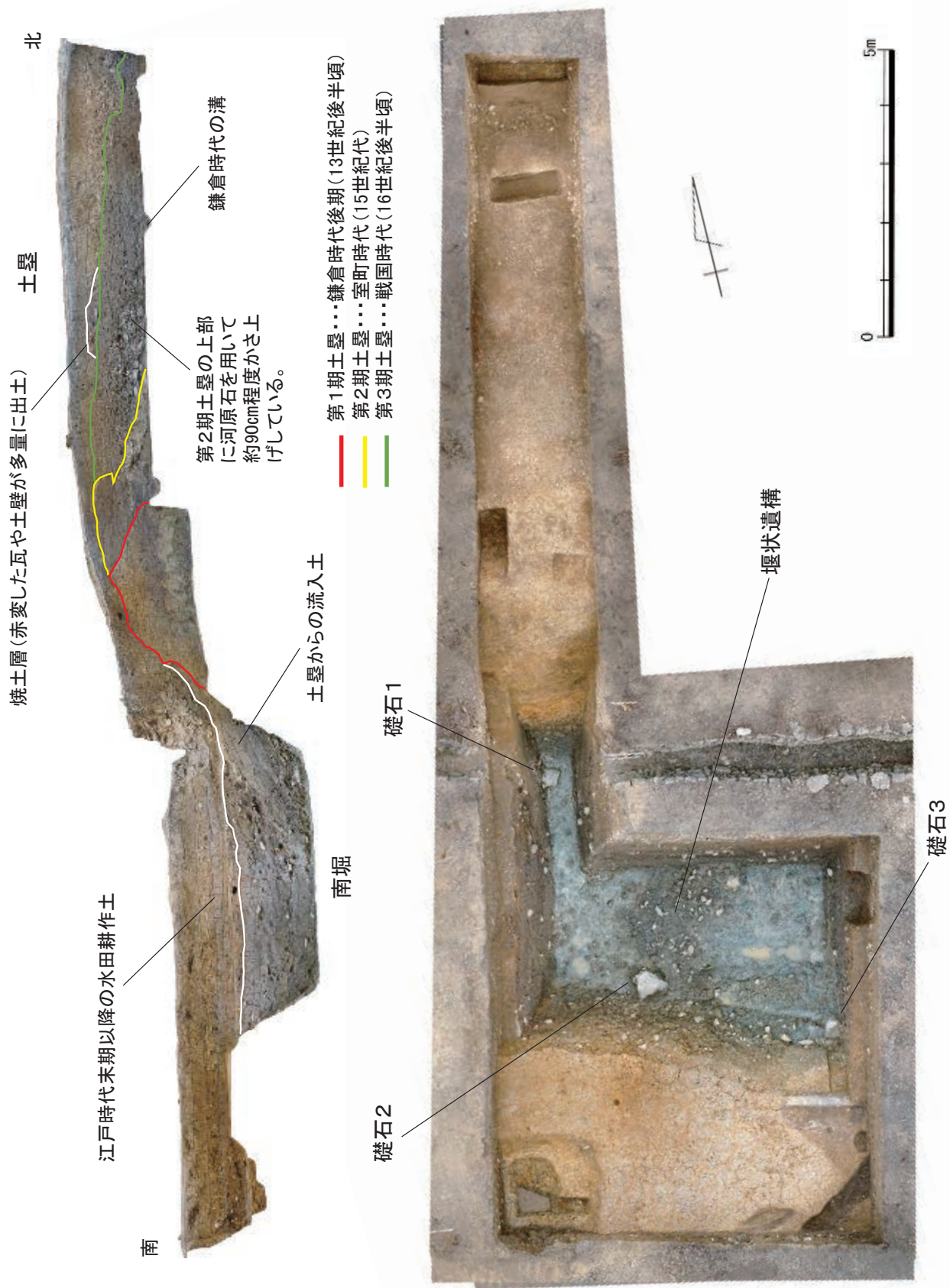


写真37 南堀と南土塁の変遷



写真38 南堀の発掘調査状況（東から）



写真39 南堀 堰状遺構と礎石2（東から）



写真40 南堀 堆積状況と礎石1（南東から）



写真41 南堀 軒丸瓦出土状況（西から）



写真42 南堀 曲げ物の底板出土状況（西から）



写真43 南堀 竹製品出土状況（西から）



写真44 南堀 出土遺物



写真45 第1期土塁（東から）



写真46 第1期土塁断ち割り状況（東から）



瓦器

中国製白磁

写真47 第1期土塁出土遺物



写真48 第2期土塁と第3期土塁の断ち割り状況（南東から）



写真49 第3期土塁（南西から）



写真50 第3期土塁の下層遺構（東から）



写真51 第3期土塁焼土層（北から）



写真52 第3期土塁焼土層断ち割り状況（南から）



写真53 第3期土壘焼土・被熱瓦の出土状況（東から）



写真54 第3期土壘出土 瓦・土壁（東から）

はじめに

今回の発表は、私が30年近くにわたって実施してきた史跡「奥山荘城館遺跡」の整備と活用について紹介し、史跡「湯浅党城館跡」の今後の参考に資することを目的とするものである。

1. 史跡「奥山荘城館遺跡」とは

12地点からなる。1984年旧中条町の5地点が指定。1989年3町村の5地点が追加指定。さらに2006年に2地点を追加指定し、2010年には鳥坂城跡の指定域を拡張するかたちで追加指定を行ってきている。現在は市町村合併を経て、胎内市内に11地点、1地点（金山城館遺跡）が隣接する新発田市内となっている。

- (1) **江上館跡** 奥山荘惣領地頭である中条（三浦和田）氏の室町時代の居館跡と考えられる。極めて遺存状態がよい方形居館であったため、昭和37・38年度に新潟県教育委員会が企画・実施した「旧奥山荘地域学術調査」で発掘調査の対象となり、学習院大学の奥田直栄氏が担当した。県内の中世城館遺跡調査の先駆けとなった。
- (2) **鳥坂城跡** 鎌倉初期に城氏が最後に立て籠もった山城「鳥坂」として、鎌倉幕府の正史『吾妻鏡』にでてくることで著名。かの「坂額御前」エピソードは、このときのものである。ただし登山コースとして現在みることができるのは、ほとんどが室町時代の15世紀後半以降に中条氏によって築かれたものと考えられる。遺構は、尾根先端の6条の堀切に区切られた郭群や20段以上に及ぶ連続段切からなる山上の部分と、土塁・堀に区切られた麓の居館群等からなる。中条氏の戦国時代の本拠地である。
- (3) **倉田城跡** 関沢の現集落を見下ろす尾根の先端上に築かれた山城である。堀切・段郭等があるが、全体で150mと小規模であるため、集落あるいは寺院に附属する山城と思われる。
- (4) **野中石塔婆群** 4基の板碑からなる石製の供養碑群である。大型の2基には阿弥陀三尊を刻み、小型の2基には地藏菩薩（カ）を刻んでいる。内小型の1基には永和四季（1378年）銘が認められ、外のものもその前後のものと考えられる。これらは、3基と1基に分かれて、それぞれ塚上に置かれているため、お墓である可能性もある。曾我禅師の伝説がある。
- (5) **小鷹宮境内地** 小鷹宮は、奥山荘を分割した文書に荘園境のランドマークとしてでてくるもので、現在もお宮がある。小丘上にある湯殿山碑がそれを示す勝示という説もある。
- (6) **韋駄天山遺跡** 平野部に位置する独立丘陵頂部に営まれた中世墳墓である。1954年、開墾によって宝篋印塔の相輪及び珠洲焼の骨蔵器が掘り出されたことから郷土研究の気運が高まり、同年8月に小出義治氏（国学院大学）によって発掘調査が実施された。その結果、多くの珠洲製骨壺や層塔・宝篋印塔・板碑といった石塔が出土した。本地点は、中世文書にでてくる「村上山」と考えられ、奥山荘北条の地頭、黒川氏に関係する墓地と考えられる。
- (7) **蔵王権現遺跡** 黒川氏の崇拝した山岳霊場で、尾根に沿って点々と堂跡の平場群がのこっている。また、山城跡を2箇所含んでいる。乙宝寺と並んで多くの宝物が寄進されており、その多くが県指定、市指定となっている。黒川領の祈願所と考えられる。

- (8) **黒川城跡** 黒川本家の山城で、中条家の鳥坂城に対応するものである。10条の堀切をもち、最前列には二重に巡らせるなど、防御を固めていた。ただし日常生活は、麓の居館部で営まれていたと考えられ、今後の継続的な調査がまたれる。
- (9) **臭水油坪** 当時の文献に「くさうつ」とでてくる原油の涌出地である。日本最古の油産出地とされ、シンクルトン石油公園として整備公開されている。
- (10) **金山城館遺跡** 新発田市金山地内に所在する願文山城跡・館ノ内跡・高館跡（下ノ館跡）・蝸牛山城跡からなる。金山の地名は、鎌倉時代から文書にみられ、相模の金澤称名寺領であったこともある。城自体は、南北朝以降のもので、中条茂資の弟政綱が興した金山家が残したものと考えられる。
- (11) **坊城館跡** 鎌倉時代後期の屋敷跡で、60数m四方の溝や大規模な建物が発見された。土地区画整理事業で発見されたが、その内容から江上館跡の前身となる地頭屋敷と考えられたため、史跡に追加指定され、現在史跡公園として公開中である。
- (12) **古館館跡** 郭内6,700㎡になる非常に大きな館跡で、土塁に2箇所折れを伴う。土塁は、郭内から2.5～3.8mと非常に良好に遺存しており、周囲に水堀がめぐらされている。2004年の調査で、15世紀代主体の館で、16世紀初頭には廃絶することが明らかとなった。
- 館主は、文献から三浦和田一族の高野氏と考えられる。
- なお他に、新田荘遺跡（群馬県太田市）や日根野荘遺跡（大阪府泉佐野市）といった荘園遺跡でも多地点が指定されており、特徴的な指定の仕方となっている。

2. 奥山荘のはじまり

律令国家が一方的にしかけた北方の人々との争いが一段落したころ、律令制が弛緩して、中央政府の統制力は非常に弱まっていた。そして、陸奥・出羽・越後・坂東などの辺要の国では、新たな時代のうねりが生まれていた。それは、下級貴族（主に武官）が在地に赴き、一族や在地の有力者たちをまとめあげ、勢力を張るといったものであった。彼らは、武力をもって騒乱を鎮める役目を帯びていることが多かったので、軍事貴族とよばれ、兵（つわもの）の家系がつくられていったのである。

そして、多くの土地を開拓していったが、そうすると黙っていないのが、中央で定期的に任命される国司や国府で権力を握る在庁官人とよばれた人々である。彼らは、田に税金をかけ、私腹をこらすことを第一義に考えていたので、新たに開かれた土地からも税金を取ろうとする。すると、在地の有力者たちは、国司の上官にあたる、より高位の貴族に土地を寄進して、上納品を納める代わりに国司らの干渉を排除するように願った。それと中央の貴族の思惑が一致したときに、その献上した土地が荘園として成立したのである。もちろん国司の側について、甘い汁を吸おうという人々も多く、国有地がなくなったわけではない。

秋田城の官職から名を名乗ったといわれる城氏も軍事貴族の末裔で、11世紀代には越後に勢力を延ばしており、天皇家に次ぐ権力者である摂関家の働きかけに応じて奥山荘を立荘させるにいたった。また後に城四郎茂長を出した白河荘も同様に摂関家領となっており、注目される。

そして、12世紀代に入ると「国住人」として盛期を迎え、系図に異同があるが、永基→永家→資国→資永の時代が城家の全盛期であったと考えられる。そして、資永弟「長茂」と子「資盛」の代にいたって、鎌倉勢によって滅ぼされることになる。

城氏の痕跡は、本歴史館の建っている下町・坊城遺跡をはじめ、鳥坂城などわずかしきみつからないが、文献から考えて奥州平泉に匹敵する遺跡の存在が予測される。

城氏に関連する遺物としては、政所条遺跡群等から中国産磁器である白磁水注・壺・碗・皿、国産陶器の珠洲甕・壺・播鉢、猿投三筋壺、常滑甕、土器皿、漆器碗・皿などがみられ、その豊かな暮らしぶりがうかがえる。

3. 奥山荘における武士団の展開

建仁元（1201）年に鳥坂城で城小太郎資盛が敗れ、坂額が囚われの身となると、すでに奥山荘の地頭に任命されていた鎌倉御家人三浦和田（高井）氏が地頭として入ってくる。ただし、奥山荘が三浦和田一族の一所懸命の地として位置付けられるのは、鎌倉における三浦氏の滅亡（宝治元年＝1247）以降のことと考えられる。

そして奥山荘は、13世紀後半の建治3（1277）年に荘域が北条・中条・南条に三分割譲与され、それぞれ後に黒川・中条（惣領家）・関沢と地名をとって名乗ることになる。その後、中条・黒川氏は、阿賀北の国人領主として中世越後に足跡を刻んでいくこととなり、最終的に上杉家の会津移封に従って、越後を去ることとなった。その間約4世紀にわたって奥山荘は、中世武士団の活躍の舞台となった。

なお、奥山荘の武士団は、鎌倉以来の多数の古文書を現代まで伝えており、また著名な荘園絵図を2枚残しており、全国的にも著名な荘園となっている。

4. 奥山荘の信仰

奥山荘内で行われていた信仰がわかるものとしては、武士団が残した石塔類や蔵王権現などの神社や乙宝寺などの寺院に寄進した仏具などがある。また、下町・坊城遺跡や新発田市砂山中道下遺跡・小島西遺跡などからは、木に墨書された塔婆やまじない札などが出土しており、中世人の生活をかいまみせている。

ここでは、奥山荘内に多数所在する石塔類をみていく。中世の石造物の種類としては、層塔、板碑、五輪塔、宝篋印塔、石仏などがあり、板碑と石仏が数量の多いものである。なおこれらは、墓石として立てられることもあったが、多くは供養碑として造られたものである。

板碑は、鎌倉後期から南北朝期のほぼ14世紀代に集中して造られている。奥山荘全体で90基ほどで、北条1に対し、中条2、南条1.5ほどの割合で認められる。ただし14世紀代とはいっても、領域ごとに主体時期が異なり、南条は鎌倉後期、北条は南北朝初期、中条は南北朝期後半に多くが立てられたことが様式から追え、それぞれが歴史的な背景をもつものと考えられる。

石仏は、奥山荘全体で70基ほどが残っており、いくつかのタイプがある。主に室町時代につくられ、板碑造立のブームが去った後、石仏や宝篋印塔・五輪塔などがそれに代わっていった。

5. 本拠地の様相

坊城館跡や江上館跡、その周辺の下町・坊城遺跡の所在する場所は、中世における奥山荘中条の政所条にあたると考えられる。

1996～1999・2004年にかけて実施された下町・坊城遺跡の発掘調査によって、A・C・D地点は、城家の時代から始まり、13世紀代の三浦和田氏の時代に最盛期を迎えることが明らかとなった。大型の家屋や井戸、おびただしい青磁・白磁等の貿易陶磁器、漆器、国産陶器、宴会用の多量の土器などは、ここが奥山荘の中心地「政所条」であったことを物語っている。特にD地点から鎌倉後期の地頭屋敷が発見されたことは、決定的であった。

これらの遺物の出土は非常に膨大で、荘園の中心地の様相が判明した希有の例といえる。

6. 江上館跡の調査と整備

江上館は、水堀と高い土塁に囲まれた武士の屋敷地で、14世紀後半～15世紀代（室町時代）の中条本家の本拠地であった。1町四方の主郭の南北に馬出が付属する連郭式の館で、南北の虎口（出入口）は、直進して入れない先進的な構造となっていた。15世紀後半の最盛期には、主郭内部が北方の日常空間と南方の晴の空間にはっきりと区分されていた。出土遺物には、舶来の高級陶磁器などが多数あり、当時において日本有数の出土量をほこっている。

館は、100年以上存続しており、60棟ほどの建物がみつまっている。当時の建物は、地面に穴を掘ってそこに柱を立てる掘立柱建物で、一時期には10棟ほどが存在していたと考えられる。

この武家居館である江上館は、奥山荘中条の政治・文化・経済の中心で、館内部では都市的な生活文化が花開いていた。

室町時代の武家では、鎌倉時代を理想とする器物が威盛財として崇められており、その価値観で収集されていた。具体的には、2個体の青白磁梅瓶や青磁袋物・香炉・盤、朝鮮製像嵌瓶等の床飾り、そして喫茶に関する中国製の天目茶碗、茶入、茶葉壺（中国・信楽）、風炉、茶釜、銚子、茶臼、猿面硯等々があげられる。当然、書画などもあったであろうが、地中に残らないので、みつかっていない。また、中国製の青磁や白磁の碗皿類にいたっては、山のように消費しており、決して珍重されたものではなかったことも付け加えておく。

なお、中世においては、儀礼＝宴会という関係にあり、酒を酌み交わすことは、主従を確認する重要な儀式であった。そこで使われていたのが素焼きの土器皿（かわらけ）で、清浄な器とされ、使い捨てのものといわれている。したがって儀礼空間からは、土器が大量に出土する。

本館では、15世紀前半代までは、ロクロを用いて底部を糸切りするタイプの土器が使われていたが、半ば頃から手づくねでロクロを用いないタイプのものに主体が移っていく。この手づくね成形の土器は、京都系の技法であり、ちょうどその頃、京から越後へ帰ってきた守護上杉氏との関係が想定される。また、手づくね土器の2点には、「急急如律令」「鬼」などと墨書されたものが認められ、土塁の拡張時の儀礼として用いられていたことが判明している。

これら居館をはじめとする政所条遺跡群の最大の特徴は、その貿易陶磁器の圧倒的な搬入量にある。当然そこには、領主の嗜好といったものも関係していると思われるが、その背景には、日本海交易が中世を通じて非常に盛んであったということがあげられる。多くの貿易陶磁器は、中国から琉球・博多を経て、小浜・敦賀に至り、さらに北へと向かったのである。

これらの成果は、江上館跡の6年間にわたる発掘調査によるものである。もちろん史跡の保存は、大前提である。その後、5年間の整備事業を経て、2002年から「奥山荘歴史の広場」として奥山荘歴史館とともに開園している。次いで、中世墳墓である韋駄天山遺跡、江上館跡の前身の地頭屋敷である坊城館跡も史跡公園として開園し、順次調査・整備・活用を図っている。

発掘調査の事実に基づいた本物の史跡整備には、時間も金もかかる。まして、その金は公費であり、市民・国民が収めた税金であるから社会に還元していかなければならない。

しかし、地域のアイデンティティである史跡公園整備の完成は、実はスタート地点に立ったにすぎないのであり、そこからいかに活用していくかが、史跡整備の真骨頂である。史跡を生かすも殺すも担当者の熱意次第であるが、しかし、独力でできることは限られている。行政内での後押し（予算化）、地

元内外のファンや協力者の存在なくしては、市民に愛される史跡とはならない。

7. 史跡の活用～江上館跡の場合

ここでは、江上館跡の例を取り、活用事例を述べる。日常、館部分は、自由に立ち入りでき、市民・子どもたちが散歩や遊びに興じている。

イベントとしては、開園の翌年から続いている「仲秋の名月 板額の宴」を毎年9月の日曜日に開催してきた。これは、奥山荘所縁の板額御前を顕彰する市民団体である「板額会」が主体となって、武者行列や歴史演劇、演武、郷土芸能、板額御前コンテスト等を実施するもので、恒例の行事となり、楽しみにしている市民も多い。例年2,000人程度が参加するイベントである。

夜間がイベントの主体となるため、途中からは文化庁の埋蔵文化財活用事業の採択を受けて、大がかりな照明や音響などを用いて実施するようになった。

このようなイベントを通じて、史跡を胎内市の宝物として認識してもらえるようにしていきたいというのが、担当者としての望みである。

なお当然ながら、学校教育において、地元の小学校を中心に歴史学習に役立てていただくよう、毎年校長会にお知らせし、現地説明もしくは出前授業も折にふれて実施している。

おわりに

「地域の文化財を慈しみ、我が町をはぐくむ。」これは、新潟市出身で、新潟県庁から文化庁、奈良大学、そして昨年新潟に帰ってこられた坂井秀弥さんの言葉である（坂井2018）。

文化財担当者の仕事は、地域社会の将来につながっていく仕事であり、市民と地域の文化財をつなぐためには、地域研究が必要であると述べられている。

地域（地元）で頑張っている文化財担当者と地域を愛する住民の力で、今回国史跡に指定された史跡「湯浅党城館跡」のもつ魅力を全国に発信していただけるようお願いして、手向けの文章としたい。

【参考文献】

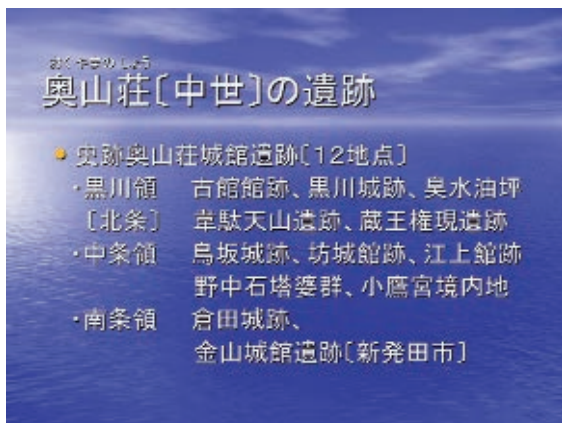
- 水澤幸一 2002 「奥山荘城館遺跡の整備と活用について」『新田氏の歴史遺産を現代に活かす－史跡「新田荘遺跡」の整備と活用』 シンポジウム記録集、太田市
- 広瀬和雄編 2006 『中世遺跡の保存と活用に関する基礎的研究』 平成16・17年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 水澤幸一 2006 『奥山荘城館遺跡』 同成社
- 水澤幸一 2013 「中世城館の整備と活用－越後国史跡奥山荘城館遺跡の事例から－」『中世城館調査の現状と課題』 全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第26回研修会発表要旨集、京都市
- 坂井秀弥 2018 「埋蔵文化財の活用に果たす地域研究の役割」『埋蔵文化財の活用と地域研究－平成28・29年度埋蔵文化財担当職員等講習会記録集』 文化庁文化財部記念物課



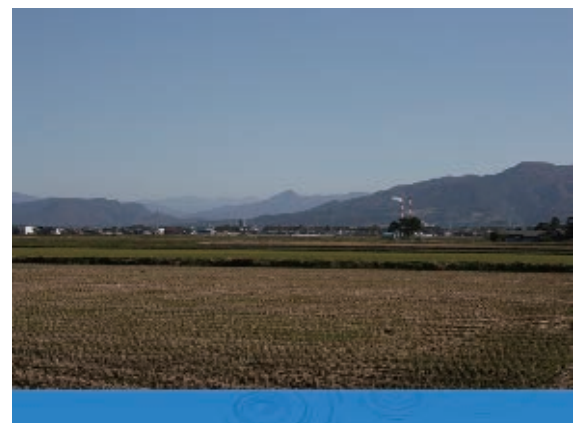
スライド1



スライド2



スライド3



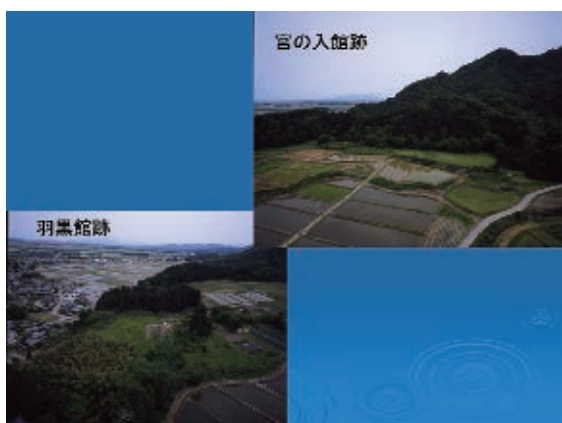
スライド4



スライド5



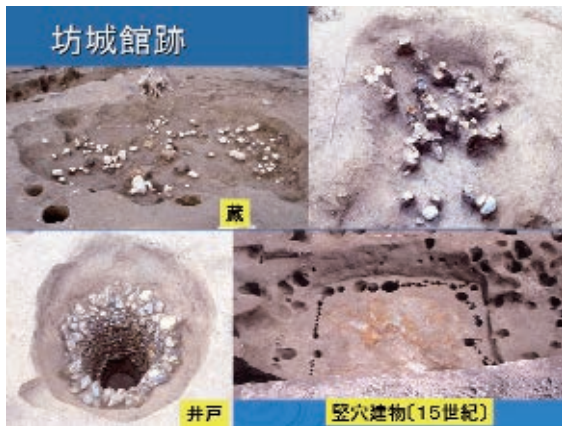
スライド6



スライド7



スライド8



スライド9



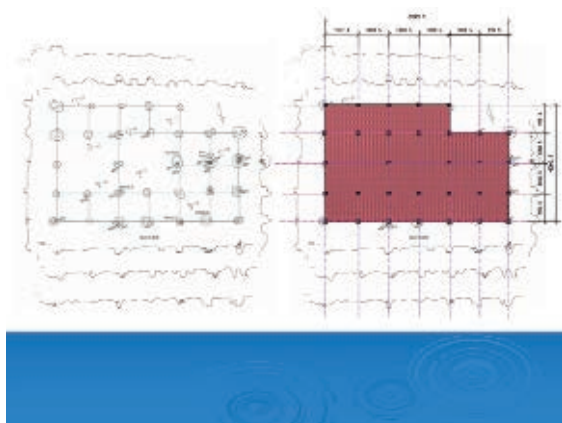
スライド10



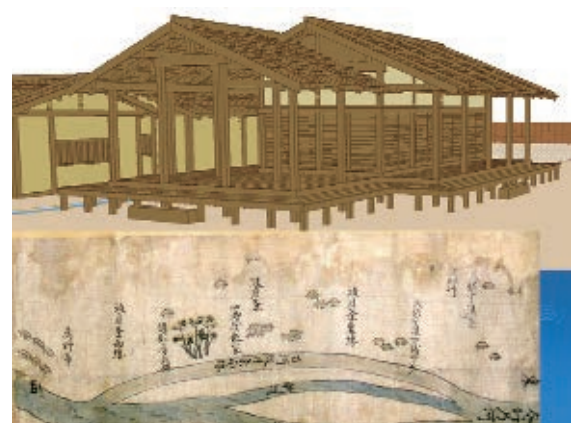
スライド11



スライド12



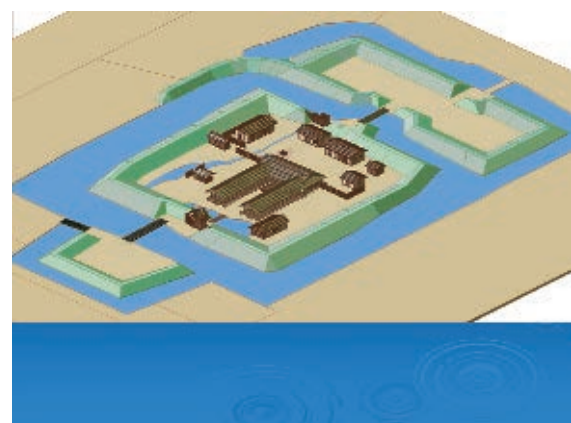
スライド13



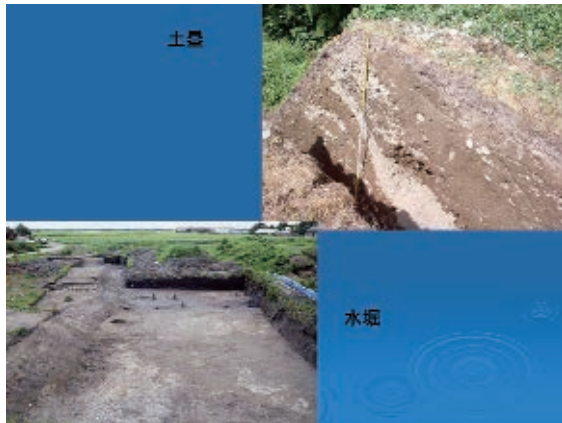
スライド14



スライド15



スライド16



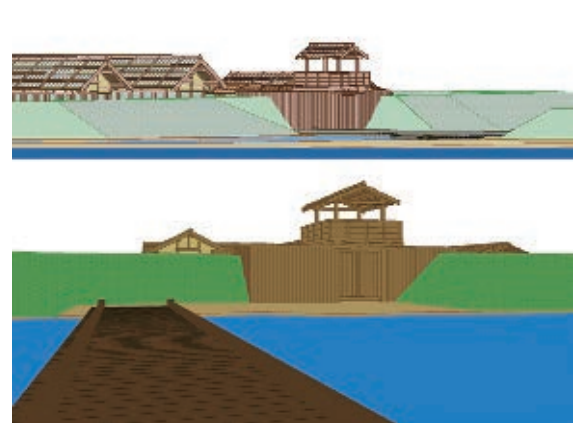
スライド17



スライド18



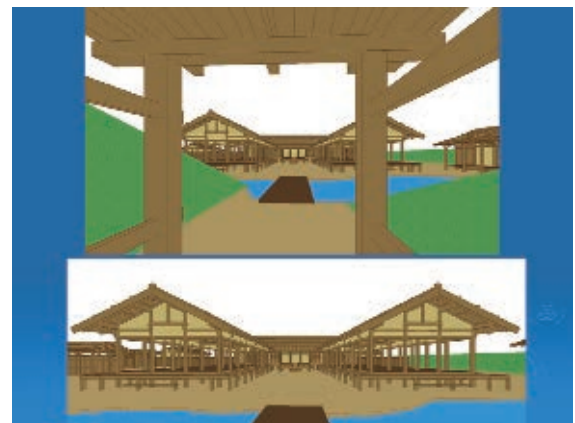
スライド19



スライド20



スライド21



スライド22



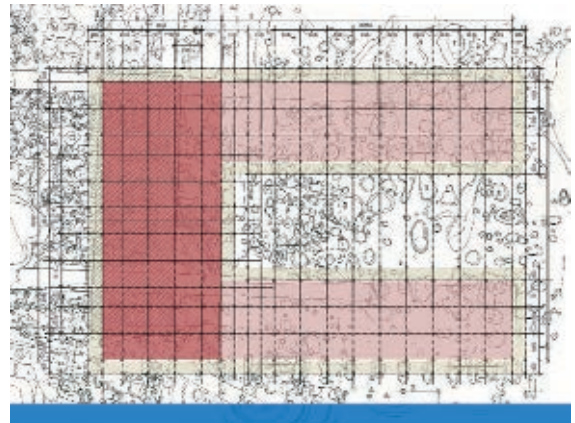
スライド23



スライド24



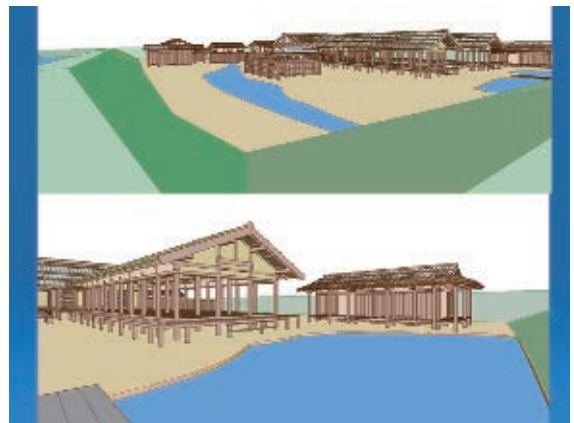
スライド25



スライド26



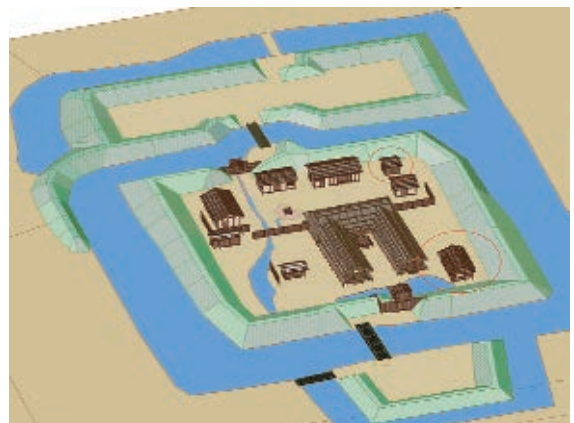
スライド27



スライド28



スライド29



スライド30



スライド31



スライド32



スライド33



スライド34



スライド35



スライド36



スライド37



スライド38



スライド39



スライド40



スライド41



スライド42



スライド43



スライド44



スライド45



スライド46



スライド47



スライド48



郭内、建物平面表示の上に観客

スライド49



休憩所は音響設備と脱衣所

スライド50



板額御前の入場
(里帰り)

スライド51



太鼓演奏

スライド52



地元の獅子舞

スライド53



板額御前コンテスト

スライド54



館内を広く使った演劇

スライド55



皆様のお越しをお待ちしております

スライド56

1. はじめに

松野町は四国の西南部、愛媛県と高知県の県境に位置する人口約3,800人の町である。町のキャッチコピーである「森の国」が示すように、山林面積約84%、町の周囲は標高900mから1,200m級の山々に取り囲まれ、町の中央部を四万十川の支流である広見川が流れている。こうした地理的条件から、松野町には森に育まれた豊かな歴史文化が存在し、令和2年12月に国の認定を受けた「第1次松野町文化財保存活用地域計画」に基づいて町内文化財の保存活用を実施している。

松野町の文化財を代表する遺跡のひとつが国史跡河後森城跡である。河後森城跡は、広見川を含む3つの川に囲まれた独立丘陵上に立地し、標高が最大で約172m、平地部分からの比高差は約88mをはかる（図1）。城域は約21ヘクタールで、最高所の本郭を中心に多数の曲輪が東西方向へ「馬蹄形」に展開する県内でも最大規模の中世山城である（図2）。なお、松野町には山城が河後森城跡を含めて17あり、県内でも山城が密集している地域のひとつである。

河後森城跡に関する文献史料は乏しく不明な点が多いが、「黒土郷河原淵領」と呼ばれていた当地域は、伊予・西園寺氏と土佐・一条氏－長宗我部氏の諸勢力が及ぶ「境目」地域であった。地域に伝わる古文書等から、河後森城跡には永禄年間初期までに一条氏側から迎えられた領主「河原淵教忠」の存在が知られている。その後、天正12年（1584）頃までにはこの地域が長宗我部氏の配下に置かれた可能性が高く、その翌年に行われた秀吉による四国平定以後、松野町を含む宇和郡一帯は小早川氏、戸田氏、藤堂氏、富田氏の所領となり、その間河後森城にはそれぞれに城代が置かれていたらしい。そして、元和元年（1615）の一国一城令で軍事施設としての河後森城は廃城したのではないかと想定している。なお、その後も伊達秀宗筆頭の家臣桑折氏が7千石を領し河後森城に居住したと言われている。

河後森城跡は平成9年9月11日に国史跡に指定され、平成11年度から整備に伴う発掘調査を継続的に実施している。これまでの調査は山の稜線部に形成された曲輪や谷部が主体で、特に西第十曲輪や本郭では発掘調査によって曲輪の利用が具体的に明らかになっている。西第十曲輪では、曲輪の出入口にあたる北西側で当時の道をはじめ門跡や土堀跡、南西側の曲輪周囲では土塁から櫓や堀による防御施設に改変された痕跡を検出している（図3）。また、曲輪の外側斜面は急斜面の切岸（人工的な崖）となっており、さらにその外側には多数の堀切や堅堀状遺構が広がっていた（図4）。曲輪の中央部には2棟の掘立柱建物跡を検出しており、うち1棟は馬屋と番小屋が一体化した建物と想定している。本郭では、城主の居所となる主殿舎をはじめ、台所や番小屋と想定している10棟の掘立柱建物跡を検出している（図5）。また、西側では城内唯一の石垣も検出している（図6）。

このように、河後森城跡は伊予と土佐の国境に位置する大規模な山城で、防御施設や暮らしに関する施設が良好に残存している。これらを保存し活用するため、松野町では平成12年3月に策定した『史跡河後森城跡保存整備基本計画』に基づき環境整備事業を実施している。



図1 河後森城跡の位置（中央）

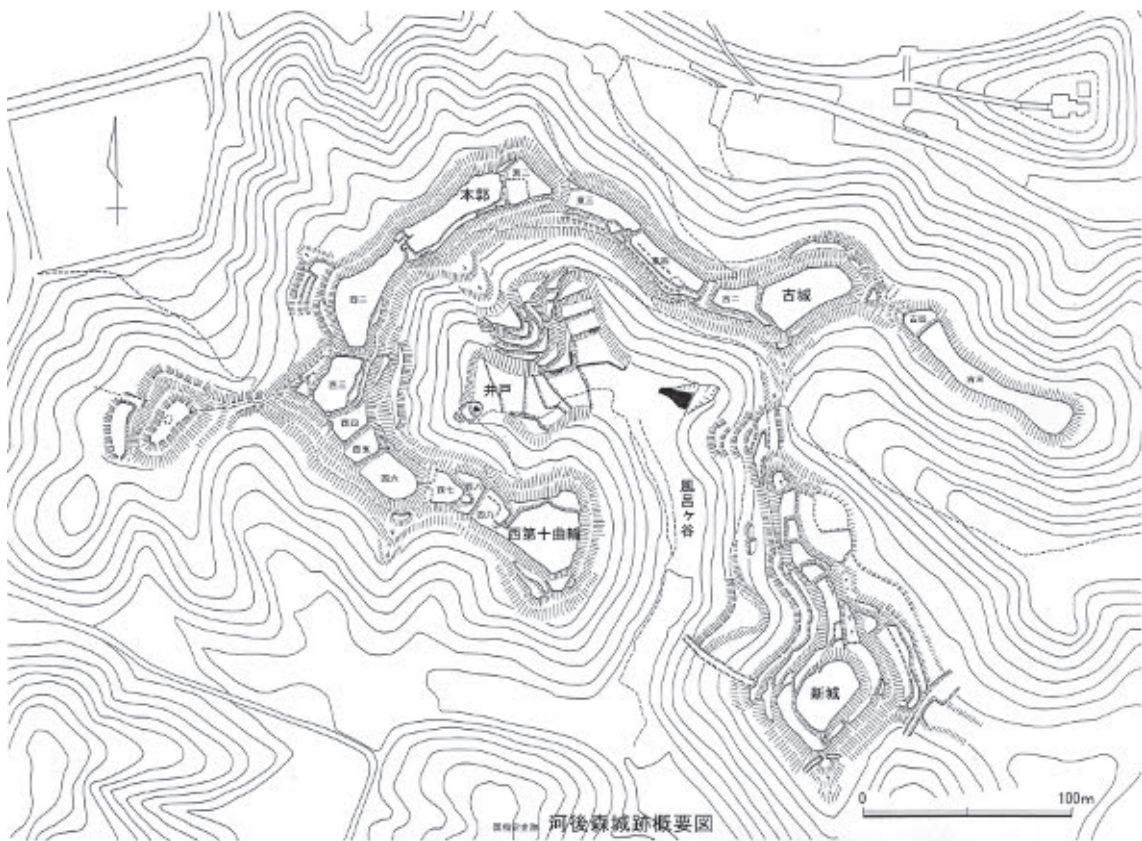


図2 河後森城跡縄張図（中井均氏作図）



図3 西第十曲輪の遺構検出状況



図4 西第二曲輪南部の堀切



図5 本郭の遺構検出状況



図6 本郭西部の石垣

2. 河後森城跡の整備

『史跡河後森城跡保存整備基本計画』では、河後森城跡の遺構が存在する6つの地区を遺構保存整備ゾーンと位置づけている（図7）。遺構保存整備ゾーンは、史跡の正しい理解を深めることが可能な場として適切であることから、遺構の保存を前提に発掘調査の成果などによる十分な資料に基づいて遺構の活用・整備を図ることを目標とした。また、来訪者が往時の雰囲気を感じ、歴史との対話や体験学習の場として活用できるよう、ベンチやアズマなどの休養施設のほか、案内板、解説板などの学習施設を設けることを計画した。なお、各ゾーンの整備にあたっては、城郭構造の把握が容易に行えるよう、様々な地点からの眺望に配慮し、中世山城の最大の特徴である階段状に連なる曲輪や地形の凸凹を除間伐植栽などによって可能な限り示すよう配慮することとしている。

平成11年度から平成27年度にかけて、遺構の表示を中心とした整備を実施してきた（図8～11）。また平成28年度から令和2年度にかけては、主に史跡内の間伐を中心とした景観整備を実施している。なお、整備事業の実施にあたっては、「史跡河後森城跡調査・整備検討委員会」を組織し、各専門分野からの指導を受けている。

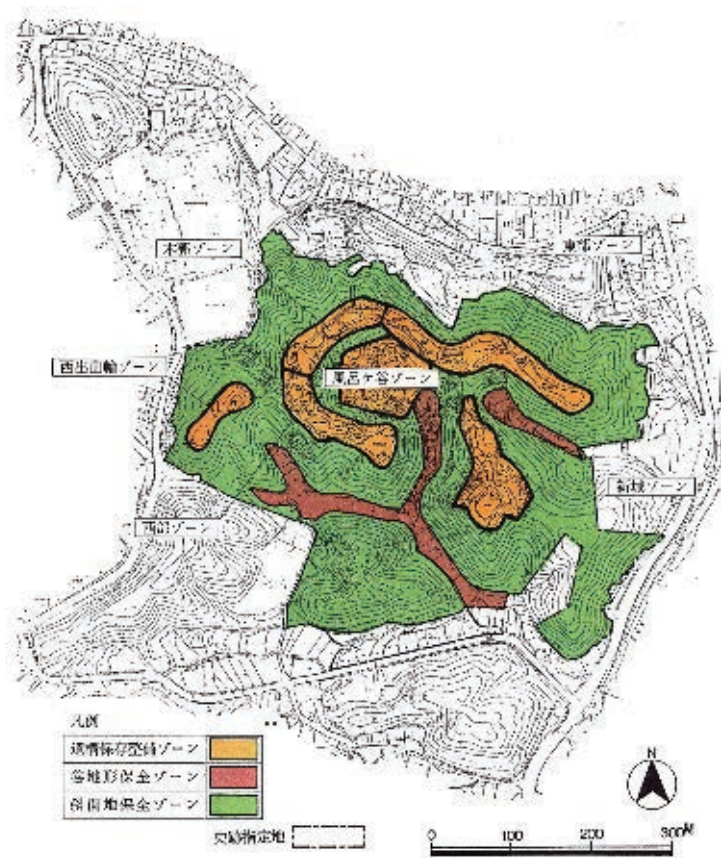


図7 ゾーニング図



図8 西第十曲輪の整備状況



図9 堀切の整備状況



図10 本郭の整備状況



図11 本郭西部の道跡の整備状況

3. 河後森城跡の活用

(1) 地域団体「森の国山城の会」の活動

遺跡は言うまでもなく地域の中に生まれ守られてきたからこそ地域景観の一要素となっているのであり、遺跡とそれを支える自然環境、そして地域住民の三位一体ではじめて遺跡の保存と活用が可能になると考えている。

河後森城跡の保存と活用について重要な役割を担っているのが「森の国山城の会」である。この会は町内の民間団体で、中世山城跡の保存と活用を住民レベルで考えていこうと平成8年度に発足し、現在会員数は約60名である。会の活動は大きく2つにまとめることができる。1つ目は町内山城跡を学び伝えていく活動である。会ではこれまでに不定期ながら独自の学習会や研修会を実施してきた。また、町主催の講演会やシンポジウムなどにも積極的に参加していただいております、これまで培った知識を生かし町外からの見学者に対するガイドや、後述の町内小学生向け授業の講師を引き受けていただいております。さらに、近年では山城の学習だけでなく遺跡の活用やまちづくりなどについて同じ悩みを抱える団体と意見交換し、団体間の連携強化にも取り組んでいる。

2つ目は史跡の環境美化活動であり、年に1～2回程度城内の曲輪や道などの草刈り作業を実施している（図12）。また、遺跡の保護と名所づくりを目的に、新城地区に群生する自生ツツジの移植作業も実施している（図13）。これは、根系による遺構への影響を防ぐため曲輪上にある自生ツツジの苗を遺構への影響が少ない斜面部に移植するというもので、町内小学校の卒業記念や一般公募によるボランティア作業として実施してきた。現在では4月下旬頃に満開のツツジを楽しむことができ、歴史好きだけでなくアウトドア派など幅広い層が河後森城跡を訪れている。会の活動はまさに遺跡－自然－地域を結ぶ架け橋と言えるだろう。



図12 森の国山城の会による史跡の環境美化活動



図13 自生ツツジの移植作業

(2) 山城を活用したまちづくり

松野町では、中世山城関連遺跡が町内遺跡の半分以上を占めるという地域性から、山城を活かしたまちづくりを展開している。中世山城の「戦い」と「暮らし」を主なテーマとし、調査成果や歴史的な評価に基盤を置いた各種の体験学習会や講座、勉強会などを実施している。たとえば、発掘調査で見つかった防御施設の機能と効果を理解するための攻防体験（図14）、本郭主殿舎（城主の居所で政治・儀式の場）で提供されていた料理を文献や絵巻物を参考に再現していく学習会などである（図15）。とくに戦国時代の料理を学習する「戦国の食学習会」では、料理にとどまらず、本郭で執り行われていたであろう武

家儀礼についても学習しており、儀礼の場や装い、所作なども学習している（図16）。学習の成果発表として、平成29年度に本郭で武家儀礼を再現した（図17）。本会の活動は、後述する演劇にもつながっている。

また、河後森城跡の整備を参加者と一緒に考えていく公開型の見学会も開催している（図18）。見学会では、専門家を交えて城内外の景観（視点場）や城内の植生環境に関する協議を実施している。景観については、山城の構造が把握できるような視点場づくりや城外から曲輪の稜線が見えるようにするため、どのように間伐を中心とする景観整備を行っていけば良いか現地で協議している。これは、整備事業とも連動している。植生環境については城内の植生調査やその分布を調査し名所づくりを目指している。森の国山城の会による自生ツツジの移植活動もその一環である。この見学会によって、新たな視点場が設定されたり（図19）、四季折々の草木を楽しめるようになった。住民参加型の史跡整備が形になりつつある。



図14 攻防体験の様子



図15 戦国の食学習会



図16 河後森城武家儀礼復元に向けた学習



図17 河後森城武家儀礼復元の様子



図18 史跡見学会での協議の様子



図19 協議によって改善された本郭からの景観

その他、町のイベントとして河後森城跡とその周辺を巡るウォーキング大会や、段ボール製の甲冑を身にまとい町内の山城関連の地点を駆け抜ける駅伝大会などが毎年開催されている。

さらに、町民劇団を立ち上げ河後森城をテーマにした演劇を昨年度初めて上演した。これは、幅広い層に河後森城跡を知ってもらう機会をつくるとともに、町民が演劇に参加することで予土国境に位置する河後森城が置かれていた社会情勢や、過酷な時代を生き抜いた人々の暮らしといった史跡の本質的価値を、「演じる」という追体験によって理解してもらうというものである。役になりきるためには、その人物の生い立ちや立場、周囲の環境などを自分に落とし込まなければならない。したがって、劇団員は自然と河後森城やその時代について興味を持ち知ろうとすることになる。結果として地域の歴史文化を知ることにつながるのである。劇団員は町内の小学生から70歳代までの男女約20名で（図20）、旗揚げ公演となった昨年度は河後森城主の苦悩を描いた内容とし、300名を超える観客の前で上演した（図21）。武家儀礼のシーンもあり（図22）、当日は戦国の食学習会の協力を得て行った。今年度は、8月に劇団員を募集し9月から稽古を重ね、2月20日にライブ配信として上演した。なお、演劇手法を使ったコミュニケーション教育は、学校教育にも非常に有効であることから、後述の郷土学習のなかで演劇ワークショップを取り入れている（図23）。



図20 演劇稽古の様子



図21 演劇公演の様子



図22 武家儀礼のシーン



図23 学校教育における演劇の活用

（3）山城を活用した学校教育

文化財を後世に残すためには、その担い手が必要不可欠である。先述の森の国山城の会などはその代表であるが、次の世代に継承するためには、児童・生徒への教育も重要である。松野町は、現在小学校が2校、中学校が1校あり、小規模ゆえ地域に密着したきめ細かい教育を実施することができている。そのひとつの例が郷土学習「森の国山城学」である。これは町内小学校6年生対象で、郷土愛や「生き

る力」を身に付け、松野町が大好きな児童・生徒を育てるため、学校現場と連携し、河後森城跡を含む山城を活用した授業を展開している。授業では、児童が自ら課題を設定し課題解決のため主体的に取り組めることを目指している。授業の特徴としては、①山城を活用した体験学習（攻防体験や戦国料理体験など）の充実（図24・25）、②ICTの活用（町内小学校（&史跡現地）を結んでの遠隔授業・他地域の小学校と結んでの交流学习）、③地域人材を活用した共同授業（森の国山城の会との連携）が挙げられる。とくに①では、史跡見学はもちろん、城の守りを体感するために現地で攻防体験を実施したり、城の暮らしを体験するために戦国時代の料理をつくったり、出土品を観察しながら実際に土器をつくる体験などを実施している。そして、児童が授業を通じて興味をもったテーマを班ごとにまとめ（図26）、最終的に史跡現地で説明できるようになることを授業の目標としている。言わば「子どもガイド」の育成である。発表の形式は自由で、巻物風の資料を作成した班や紙芝居形式の班、建物の復元模型を作成した班など、大変ユニークで楽しい資料が完成していた。ガイド検定と題した現地発表会では、保護者の前で手づくり資料を使って堂々と説明する児童の姿が印象的であった（図27）。聞くとところによると、後日祖母を連れて史跡を訪れガイドを行った児童もいたそうである。なお、調べ学習でまとめた資料は、史跡現地に子ども看板として設置している。



図24 体験学習の様子（攻防体験）



図25 体験学習の様子（料理体験）



図26 調べ学習の様子



図27 史跡現地でのガイドの様子

おわりに

以上のように、松野町では河後森城跡を中心とする中世山城を活かした取り組みを実施してきた。遺跡はそれ単独ではその価値を十分に理解することができず、遺跡を包括する自然環境とそれを支える地域住民が不可分に結びついてこそ本質的価値を理解できると考えている。これらを念頭に置いた河後森城跡の整備・活用はまさにまちづくりそのものであり、今後もこれらを推進するため「第1次松野町文化財保存活用地域計画」に沿って松野町ならではの取り組みを行っていききたい。



湯浅城跡 焼土層（北東から）



藤並館跡 鎌倉時代の土塁（東から）

**「湯浅党城館跡」 国史跡指定記念第2回シンポジウム
湯浅党城館跡の保存と活用 発表資料集**

発行日 令和3年（2021年）3月20日
 編集発行 有田川町教育委員会
 〒643-0153 和歌山県有田郡有田川町中井原136-2
 TEL 0737-22-4513
